聞恭奮奇俠客傳 第一集 三

開卷驚奇俠客傳 第

122
25

東京圖書館

和書門	小說類	一六函	三架	六〇號	二五冊

閑卷驚奇俠客傳第壹集卷之三

東都　曲亭主人編次

明治三十六年

第五回

東京帝國圖書館藏

MOMBUSHO

木住ゐ謁しと南將舊緣を感ぜ便宜を演く老尼村酒を薦む

却説新田貞方主ハ畑六郎二時種と従へ〻千葉の城下ゟ程遠ら〆福草村を過りゐるに。これぞ這街畫頭ゐ舊く〻草の庵あり。左右を樹牆ゐ折環らし〻る。柴門ゐ小牌を掛て。今日休ト。とあるを。貞方ハ。のそ時ゐ這菴の叢鶏ゐ。黒ゐと赤ゐと三隻の雄鶏の穿のそ出せし一箇ゐ蜥蜴を。爭ひ〻堪ざるありけん項毛を怒起距を揚く。鬨ゐと半晌許。一箇ハ是怒る獅子の。谷を落さんとする勢ひあり。一箇ハ亦暴る黄熊の樹を拔んとするゐ異ゐ〻。一来一往。虚々実々。紛々として散せる羽ハ。御室の山の秋風ゐ楓葉を龍田へ流ぐ像。霾と

去て蹴飛る沙い野作ふ在りて高濱ふ胡沙起曇るふ似てるべ。此彼共ふ血塗れて。
片息ふるまでも。戸は閉ふて已ざりしが。赤い竟ふ桃難て辛くして弓矢走て柴門の
内ふ入りしに。黒い影も逃さじとて。暮地ふ好ふて。登時裡面ふ老女の声して。這畜生
ら。生平ふ迭ふ睦く。爭ふとの。けいるどや戦けんと。獨言て沈吟して。
然て。その所以ふ。南北両朝ふ和睦の後。新田楠自餘の人々忠臣義士と弓
折矢尽ふ絶果たふ似れども。西国ふ菊池あり。東国ふ新田あり。北畠大和ふ越智伯者ふ名和或ふ武家
足利氏。その中ふ新ふ伏し炭を呑貌を窶して。再義兵を起さんと。ふ鉾を伏せ。或ふ遣鄙ふ世を潜ぶる。
鶏の闘戦ふ赤い則南方残燼黒い則北方水徳既ふ時運とるとて。後兵
勝負ふ料りがたい。そ那方ざるの這地ふ来まして。そを必俺大檀那の商量
敵ふせれんのを。谷の狙猴の水の月ふ。のみ。そ撈れる迹ふ。ふ薄情さとて。

吠て。鳴立る。外面ふ自方主従那鶏の闘戦ふ路去りあ。柴門の頭ふ立て
恋ふ。樹牆の内ふ人あり。獨語て。ふ事情ふ。驚ふ退て。畑時種と共伯ふ。
樹間を尋て。覗窺ふ。菴主ふ。一個の女僧の齢ふ五十あまりあり。両折戸の蔭ふ。
自方主ふ時種ふ目を注し。又退て。著ふ。
檐下を借りて。憩ふ。雲時汗を。もるべ。且一碗の水を乞て。渇を。愈て愉うん。呼門
せよと。言ふ。ふ時種。ふ。その意を悟て。現宣るごとく。這頭ふ總て野田ふ。憩ふ。
蔭ふ。他。ふ。世。桃ふ。牌ふ。休トとあれば。責トの休日ふ。ひとも。請て。去向の吉凶れ。
知て。拠て。ふ。先て。ふ。柴門ふ立よりて。卒小ふ。ふ。俺仏主
従ふ旅客ふ。亭午の秋暑ふ路去りあ。且く檐下ふ憩て。水一碗を。
功徳ふ。ふ。弓を。憑ふ。と主ふ。人の仰られて。ふ。庵主の女僧ふ。
苔て。ふ。徐ふ門邊ふ出て。ふ。左見右見て。領て。ふ。易て。ふ。朝ふ。南

風るれバ這日盛かりに何処へ行ものなら主共侶に這方へ入りて暫らく休ひ給ひねといふを。然バ主従ハ否ふべき辞もなしとて引れて裡面に入る程に。貞方主ハ笠脱捨て先に立て正屋の縁頬に尻を掛れバ。庵主の女僧ハ何やらんで其首ハ日影の近き所に立寄時ありとも草鞋を釋て。やよ従伴のものらも此首の背門より吹融せバ涼しと倍せやよ喃々と真実らして管待親切なりける。推辞むべきもあらざれバ。肚て其意に任する主従各一草鞋を解く。貞方主ハ正屋なる箕戸の頭に坐を占めたる。女僧ハ連りに請薦めて上座に推のぼし。却其の迹に時種をも處らして爐の火を撥起し。鏵子を掛て措試こつ。沃ぐ茶碗の鈹焼と共に旧る二荒盆に乗せて温茶を汲うち誘ひて薦ばおるに態に主従ハ欲びを演て。ひたすらこゝにて喉を潤し。いかにも渇を醫しける且くして女僧がいふやう。刀祢们ハ何国より何処へ往き給ふや。千葉さまの城内に相識ありて来ませし歟と問れて貞方ハ其気色を秘して。否千葉殿の城内に由縁とてなきにあらず。俺们ハ鎌倉なる主従

二人で遊歴しつるが真間の古蹟もなほ見まほしく。且宿願もあれバ。鹿嶋香取の両社へ詣んとての旅にあるなり。おのれハ菴主ハ貴トを生活にしたまふやうなれバ。又甚なる故に休トといふ牌を門の柱に掛られけり。某ハ旅客なれバ吉凶を問ふにあらねど異日の再会料り回くる。俺宿望の成就すべき歟又成就せざる歟。願くハ推て我為に一算施し給ひてよと請れて女僧ハ眉根を顰めて。しばらく思案したりけるが。賤尼が卜ハ錢卜にて著を数へて八卦に由る周易にあらねども。其たゞり多く見あたりぬるなれば。訝しく思はせん縁故を報まうさん。急なるには嚢ハ賤尼ハ少かりし時より観世音を念じまつりて普門品を讀ければ。憐る日ときひなけれども過世ありて良人を喪ひ膝獨子に先立れて。よるべなき身となりしかば。遂に頭髪を剃捨て。這首に菴を締びて彼此人に託鉢して絶ぬ口を餬ひしが。素より田舎の事なれバ身ひとつだに頭陀袋を廻国せんやとおもひ折有一夕の夢に観世音の示現を被りしより不思議に得たる銭卜の奇特によりて人の為にその吉凶を

占ひ給るに十二銭より外を受ひど十に十なるべし當らざるとなれば日毎に詣来る人ヨスクロ。そもそも饑も世を安らるに渡れども世の人賤尼茂銭トの妙算比丘尼と喚做し。這銭トの起原は往昔支那漢の時京房と云ふ博士銭六文をもて吉凶禍福を占ひしとあり。一博識のいれかどる。今はその技伝ふれば那土ゆもを知るものるし。況這大皇国は竺も及ばぬるをもし。敢て夾雑も泥ぎ者も賤尼が自得し伝りしは身の才覚はあるべし。甚だ薩の利益に依るものなれば當らざるなけれども。但月毎の酉の日あるべし。占トの合ぬものを甚麻ぞと推とれば酉とりて離日と生。五離は離別の象あり故に悲憂を主る世に占トの合ぬもあの戌ぬると。観音薩埵の逆示さるのひ。酉の日毎に牌を掛て人の需に応ぜれば人も亦来るとなり。げに則酉の日あれば怠徒然に伝るべ然ばあくまの何ぞ利益に伝ふんを。時に取るべきとて伝れとひて外面瞻仰て今はや日昏れ。午の時の初刻に菩薩の

示現に美りしに物は相見るとて喜ぶ易傳に離は相見ると離は南方の卦とけり。五行は則火とし十干は丙とし。その丙と艮と相見るとは必喜ぶ喜神の臨む所なり。幸にとけの九鼓は丙午の時に當れり。怠れば艮の方に向ひて占ふとは合ぬ。只見のとは過ぎぬ。丙午の離火とて。庚酉の兌金と対る時をいふなれば倘その時を過ぎぬ。一日は占ひ一と正首に説示を主従つらくらに現這女僧の能辯る。記憶も亦尋常なれば必做をとあるべし。感して憑し心地なり。その中に自分主は必ぬ膝を找めそのうく趣あるるとよれ折ふ来るを願ふに占ひ。快々と急ぎ。妙算者に領ぬ。這方へ来を。身を起して紙門を開ぬ。佛前へ誘引ふ。時種も重紙門の頭に找て俱るふ。家作は絶ふ三間に過ぎ外面に席簾六枚を布備け。方二尺の地炕あり。上に一間は佛檀ふ。御長一尺あまり。観世音菩薩像を厨子の内に立せり。左右は草花を磁製の花瓶に建て。竹泊置の土器に菜

キレンシン喜神は道しと丙と到る所の方に見るなり甲巳の時日の式を通して丙寅を沿る。まだ寅あり艮に隷も艮を喜神とも飲とれば做て知べ

信濃正堂印刷

餅を供物に奉り常香盤より鼎鍵と立升る香の煙に補陀落山の雲と疑ひ
鳴る木魚の音に蕭然として祇陀林に降伏ぐ雨に似るべし登時妙算に雲時
菩薩を祈念し御前に置る錢六文を取下して擲つに既に顕れる其の錢に面背
を吉凶を知るやあり円徒まち三度ひして錢を菩薩に返しまつる也貞方主をそそ
占兆いかのうへもるに大吉を伝る且その縛の紙びを御佛まつりそ介後詳に報伯
らん且く等せ給ひとそろるさろ恭く一巻の経を繙く並門品を讀ひけに貞方
主のそ尽に妙算の後遍に在しそ尾ろく佛壇とうあま本尊の左右に建る位牌を
各中に金龍寺殿贈正二位黄門真山良悟大禪定門建武四年丁丑秋閏七月二日と
記せり義貞卿を祀れるそ左の方に春宮亮義顕朝臣左兵衛督義貞朝臣及
貞方主の先考をそ左に一基左少將義宗朝臣の位牌もありけり又その右方に刑部
卿義助卿その子右衛門佐義治朝臣及近屬底倉をそ立びあり右少將義隆

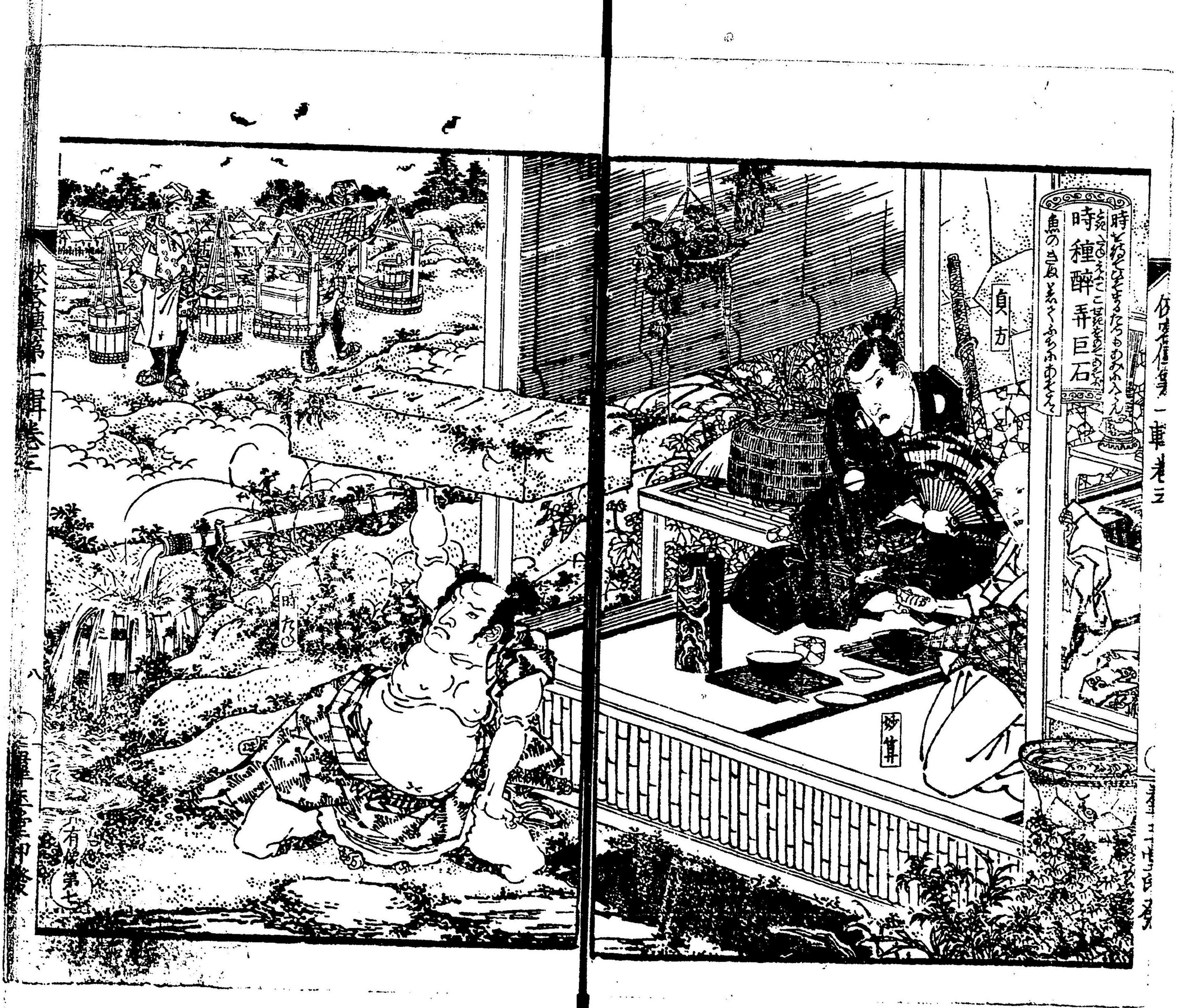
朝臣の位牌さへ措れる但是のみにあらず額田鳥山江田桃井大館堀口を至る
まで新田の氏族の先霊を祀られるもそれ〳〵ぬく心に許そ紙門の外面に伝りくる
時種とそろへそ竊に指さしに示しあへり時種も赤ちとそ驚そつ又訝して鄉に柴門れ
頭をそ赤黒二隻の鶏の大く鬨ひしより時那菴主の尼法師ぞ方に由縁あるのあん問まほしきよと
と又そつ黙しとそ既にして妙算に経讀果つ巻収をそ誘とそろに貞方主をそ
立て故の席に還れば時種も快退く復縁頼に伝りくる當下妙算に笑ひぶ貞方
主に対ひて今も壽に占兆に大吉に君に南方火德を九紫の陽數あり
へども一白の水に対せられて久く本意を遂ぬ然れ當国に来まをしに必ず優
資助をして宿望成就あらん因て熟考へ伝るに君に寵ろ多くそ尾ろ九龍
武士あり疑ひるに貴相あり徒れば必南朝る名將達をそ立ん他人に

やく去れ。賤尼に諦させ給ひなバ。出宗ハあらで幸ひあらん。願くハ名告らせ給へと問れて驚く貞方主ハ只だ後方を見かへりて齊一驚く時種と面を照して忙然と応難さえあへしが妙算ハ物をもとらに領して声を低めて。かの疑ひハ理り也。然らバ且賤尼が素生を報すべし。左島許ありしとも守せなへとめぐて四下を見まハして賤尼が大父ハ鹿島秤権平當仲と喚れ。千葉家譜第の老黨にて主君宗胤主と共侶に二井寺合戦の時戦歿たまひぬ。と家の口碑に傳へ侍る。又賤尼が父にて侍るハ権九郎直仲ハ宗胤の孝子なる胤貞主に仕へまつりて年来肥前州に在り。嗣たる子どもあまりしが朋輩の二男なりける権七実仲を粮とて俺身を妻せ侍りしが。後主君胤貞主も俺二親も世を逝りし折から南北両朝の御合體によりて宮方なる城ハ迷なく攻落され。然しも累世鎮西にて勇将の聞え高かりし菊池殿さへ足利家へ兜を脱で鉾を伏せて降参せられし時宜なれバ。主君の跡の事しもなく。肥前の領地を削られて。家臣も離散しぬれバ。賤尼が亡夫実仲ハ父祖の故郷で侍るから這下総なる千葉に還りて幾程もなく世を逝りしが。一個の男児ありしかど。それさへ千才にも足らで夭て。暇痾で亡なり侍りしバ。緇衣に貌を変て這首に弁を締びしより衞にも呼せなりし如し。ある人大父當仲ハ陪臣なれども名だたる猛者にて。笛根竹下の戦ひに義貞主より感状を賜りしなり。その後二井寺にて戦歿せし折。総大将より。の情まをはなして。その子直仲を召させてハ。と扆せん仰ありて主なる宗胤の亡骸と共侶に葬れて厚く吊せなさしぞ侍る御恩を二親の時々あらひ出て俺們が世を逝りても那卿并に新田殿の御一族のおん菩提ハ宗胤主と異なることなく吊ひまゐらせよと宣れるなりしバ。荼を締びし初より亡君宗胤胤貞主そのおん爺の後世のみかハ大約新田の御一族のおん位牌さへ本尊の左右に安措まつりて旦暮の回向を懈らで。年来まつりにける。然而賤尼の錢卜の彼此にまたよ今の城主千葉未介兼胤ぬしに伝々と告なりしものやありけん。賤尼の素生を知しられて。他が父祖ハ肥前なる家に仕へしものとハいへど名ありけるものとてもゆへ西国にその縡の趣口碑に傳へしもあらんを昔

満貫の逝去を鎌倉大草紙に応永十七年と記せり　あやまりなん　鎌倉管領代記に応永十六年とあるは誤なるべし

ひとりの守まれし。快々参れと懇に仰下されふまり。今後は城内へまゐりて見参に入まゐらせ数回ふまり侍り就て一箇の秘事あり故の鎌倉の管領さるとゝふ去歳の六月廿二日に卒去あるひまり当管領持氏さまのゝ年少にはゝ坐まゝ執権上杉憲定入道禅秀已に隨ひ政ごとを動まれば貝の沙汰あり然程に城主の侍所の別当を年来望まゐらせしより当管領に御許容あり仰ぎ下らるゝと那執権憲定の柱石と宿望空しくあるべき兼ねて主のゝ為に企あり御一族に謀り合せて鎌を磨ぎ粮を取入れ籠城の准備整へ給ふ。其方の軍ゝとの機を顕はしめ給ふ又衆議を凝々新田の餘類を取立て総大将に仕ふ義兵を軍ふ名あり陽屋少将義隆に底倉に馳参れ候ども貝方主の存命て深く潜ひ給へ。這方へ来り共に大義を伸んとのゝ宣ひしよう故あり賤尼に侍ふ徒腰心をもち明て告ふ銭ト既に知るようあれば然ても匿まゐらせ給ふ孫と共に今の身の便宜を告て問ふ

憑しく少ゝを貝方主に為ふ陪て心ふ出ひ給ふ今這老尼の長物ゝ為ふ據ふ乱れる世の人心飯の中ふも鍼あれば只一朝の奇遇ふ引れて出ざるとゝふ人や縱言語忠告ふ。俺ふ便宜のようあり之ふ出家ふしと且女流へ果敢ふ婦言と信容て石告らば悔ひ給ふもあるべし。何とゝふ難て稍沈吟ふ時種ふ応ふる。と起る性の色を找ふ方より後方主の袂を掖動して。ゝ皆御利運の豆則兆ふ舊縁既ふ分明ふ持佛ふ置れ給ふ位牌ふ言の證据ふ做ふ足れり倘這便宜を失ふ後悔ふ及ぶ臣ふ任ふ辭せず諭ふ。制めふと此ふ聴ふ。妙算ふ対ひて出ふ舊縁実義既ふ言の行ひを知ふ現一日の奇遇ふ又何を隠ふ推量せられ如ふ俺君ふ是新田の嫡孫前越後守左少将貝方朝臣を俺ふ従ふ某ふ六郎左衛門時能ふ為ふ孫畑主馬介時実ふ獨子ふ畑六郎二時


時
種
醉
弄
巨
石
負方
妙算
時
有
侯
第七

種是なり。鄙ふ菴主もられどく。南北両朝御合體の後足利義満明盟ふ叛くて。その勢ひ無くして。変詐素より限りなく。新田楠の餘類なれども根を断葉を枯さんとせるを。その朽ちく神も怒り人い怨むとぞ。御和睦の今ふして。主客の勢ひ同じかれ自方軍威海振ぐ。曩あい奥の孤城を落されて。又哉路ゆも上野ゆも潜びくるく主従二人投て往方も定めなき旅より旅ふ赴く折ふ。当国の守護領主が鎌倉管領を竊ふ怨るよりあて。鞍馬々と世の風声を信濃路を偽りて然とそ虚実い料りがたう千葉の城下ふ近つきて。且その虚実を探るべくその支果と実ならば俺君大義の資助ふ。便黙もあらんと主従ぐ其処ふ計議を旋らし。這地へ伴しけるふ豈あらんや蓄縁ある尼公の葬ふ立よりて。這吉左右を守んといるよりい差ぶい方便とて千葉殿へ汲引を做て給てんやと其旨諦を當坐の答ふ妙算いはもとより領ぜう席を避て。却て従ふ對ひてふ。鈍ぶ賤尼ぐ銭トも原是佛の授与れ時ふまりて奇特あり。

然るふより南朝の残將遥ぶ猜せ。との違ぶと詳るふ。仏合を兼りる嬉しかよ。俺身老女のなれど大事ふ預るべくもあらねど。幸ふして千葉殿の顧を年来被り侍れ見参いと易く。折と揃りそなえんと竊ふ俺へまわらまべ。支做るとなれ亡親ふ。のれ一芳の始ふ。終るあれ忠孝の本意ふ稱ふく恁まをふ教えとあらばやり。且くあふ這留まれ。吉左右を俟せあ。吁愛たやと祝ふ舞ぶて又他事もなくて。方ふ盃く領ぜのひて。あらんあいあちゆる。疑ふとあいあいねども。言一トさび口より出ふ駒ふ赶ぐて。と宗ふよりて時種ふ先をせられてのと聴り。悲意ふ任して那一議の成不ら少くあらばい尼倉ふ去るべれ。今よりて憑しく。宗ふのるい鄙ふ這門邊を赤黒二隻の鶏の大く聞ひより時赤い肩て逃亡ふ折り菴主ののれとを洩りくその意を知る。那赤鶏を南方の残將餘類ふ譬られいふ然もあり。ふ。るぐる傷を被り血ふ塗れ脆くも肩て逃亡せい。愉快らぬとも。今ゆる哭ぶ件の一議の約整を俺身の

仇いふるべき祥おわるまじやと潜めて又向のへ妙算頭どちら捧くいでゝ祥ふ佐ん。
足利方ふ辟言る。那黒鶏の猛くして一旦勝ふ無るとへども。皆所と傷られると知らず。
逃去敵と赶甚て柴門の内ふ馳入る程ふ那樹の幹ふ突中て忽地ふ息ふ絶ゆ疑
くふ死るを他御贔せよと指甚ふ貞方主も時種も訝りるゞ晴を定め遥ふ庭の樹
間ゝ見る。果して件の黒鶏ハ何の程ゆ敗死てあり。當下妙算又の者ふ那鶏共ハ近
追の村人の養鶏るゞふ甲夜晨せを息嫌ひて送る。這首へと来る。理るく賤尼ゝ
預け佐ふ出家ふ要るに物るゞ。暁を知るふ便りとられハ。折々ふ餌と与るのゝ
かくもあれ既ふ勝る黒鶏の死せるは。自方の吉兆何の不祥ゝ佐るべき。銭トとゝ那鶏の
勝負もやくの如くふ佐れ時至れりとのまくのゝ願ふ疑念を祛けゆゝ。意見ゝ与るゆゝ。
皆ゝ為ふ佐りとふ。婦人ふ似げるに辯論ふ主従齊一感嘆とりて趣亦是理あり。
現窮冠ハ赶べきに那黒鶏ゞ勝ふ無りる不覚ふとりて敗を取る人の奇伏も亦

怪へのに敬言ふるさゝのゝ判断甘心々々と稱へ笑坪ふ入るふ主客の問答時移てく。
下晡ふ至りゆゝ妙算日影を瞻仰て。嘻俺るゞ鈍ゝ。日ゝ大く傾佐るふ物欲
きゝてゝとゝ例の豆腐ハまゞ来ゝ。那舛沽奴も何ゝとゝ。道心者ふハ得意ゝ。
と見貶ゝと疎くゝ佐りたる欲快来よりと呼佐て既ふ立まくせ折ゝ豆腐々々と呼声少
くゝ漸々ふ近くゝ佐りて来れハ妙算ハ遽く盆と引提て柴門ふ走り出るゝと拉ゝ
喃々と招くふゝ時種ハゝ尽ふ障子と引闔て主従倶ふ隠れゝ。登時妙算ハ
豆腐一挺買とりて銭と遽与ゝて裡面ふ入る程ゝふ外面より舛屋ゝ佐ふ何
菴さる酒醤油の御用ハゝ。ゝ。ゝ。ゝ妙算又ゝ佐ゝ不樂ゝ用ゝ
や且く待れと留置て棚より卸ゝ醉筵ゝ左右ふ命り走り出て喃舛屋生平ふハ一
合二合より外ふ要るに竹垂木るれど客人あれハ一舛買んやゝ美酒と這醉筵へ客
限り節ねゝ。阿足ハ担ゝでゝ遽与ゝと舛屋の販子と受とり微

笑く。お菴さま這醉筯は一舛近く入り申べし。擂ぶるとせのあるもやとせへば妙算もうち笑ひて。然へ擂ぶ両箇あるーを鼠が棚よりうち落し。物の役あり立ぶるくろ器樽をもとんより快節ぶもと急せば販子は呵々とうち笑ひて。両箇の桶ある瓶の茶盞を此彼と極取く。調合して件の筯九合あまり量り入れ。得買油は其麻と寄せ。木口は醤油とさのの朝買へるぶその尽あり。程又来ぶその折ぶの價を取くせんとせへば販子は領ぶく。そを何時とも賜りそんるぶ又御用と願ふのと応て躍く両筯の桶の荷索操り杖へ掛て擡起して声高ふ舛屋々々と呼びぶく走りそんぶるふけり。然程ふ妙算は又醉筯を推りて外面々々柴門を引闔く足ふふ故所ふ帰り来く却主従は對ふてふ。

あのふどく身ひとりそれが庖湯挿ぶ志ある程ふ。能の疎ふるうんと且く凡一のへ。とうふを時種推林ふめて。そをうち措一のへ。俺今ぶ火を焼んとこの指揮を頼むのとへば妙算うち笑ひて。噫物体るふふ。定賓客ふ火を焼さるぶ盞とと精悍く立ぶ自方も禁難く。倶ふ労いのひけり。恁而又主従は等と凡半晌ぶる日景ふ傾ぶく門の槐ふ寒蟬の頻鳴くひぶを向上ふ。残る暑を忘水溜る覓立日絶て霎時端居の縁頰の檐ふ営む蟢の巣ふ掛る彪脚蟢ふ風戦く黄氏皆近くるーー比妙算はふ料理ふ只一種るる豆腐の羹酒盛り醉筯ふ米盞とり添てひと大ぶるふ塗折敷ふ咸うち載てのと出る且羹の椀と素木の折敷ふ取りて主従ふ羹あてのふやう。

寔ふ陛下の田舎ふ住れば管待まるうまぶ東西もるー。況や早の言ふ火ふ嘉ぶ結びて揺る可の所壁のもでふ住れども旅ふ。あれば椎の葉ふ盛りとり詠れ一歌のあるも結る時ふそありけん。飯も程るくまるーせんと且あんー筯を取あげのへやよあんー口ふ懐ぶとも切く竹並木でも過一のへ。長途の疲労の癒りて今賓はふく睡らるのへんーやよ啼々と他事もるぶ。欵待態ふ主従は歓びと述く共倍まる黒美の盞を取りそんる。田舎酒醤油の花もるく。香もるぶ柳の白筯を深るぶりふ。鱸ぶ細料理も折ふ。鱸ぶ擇まる人ぶ。輙

鮒の一杓水も恵ありけんと思ひ出で登時又妙算は盃をとて勧ふと貞方の主推戻し
且あるドとろけ出でめそよと辞ひ申ず果しなければ妙算みづから取あげて強りてけれども
然らば阿釀を試てん乞さをめへと身を退して爵ふ酌く半盞許を一吸ふ飲盡
懐紙をとり出て両三回盃の縁を拭ひ膝を找めて恭くまゐらせると貞方受
こりて酌しと躰て傾けて又妙算に返しぬ。それ家臣と會釋をもとり主客献酬の
口誼ふ盃は巡れども貞方主は沙量なれば一二度ふして辞ひ申ぬと妙算あをく請屬を
必ずの隨ふ醉たり又時種も浮けるふ時種素より酒を嗜めば竟ふ獨り受ないと
大ひなる醉笹用の酒送りるく場けりその間ふ妙算ふ献をとありても酌を任せ一合酒
量なれがそ半盞あるこれ喫ざりる既ふ日の暮ぬ妙算は行燈ふ火を点し蜜を
焼てるを四面表の物くこひふ主従を慰めるる語次ふ向けるを実直奉ん京鎌倉より
ん訪像簟をそと殿達を索さをめふと守ふ繞る一個の従者を招て漫ふ言ひい。

危ひとふ仕らまゐとのふと貞方うち歩る。侍ありひる八理り為る。縦十名二十名士卒を左
右ふ従へりとも多ふ勢の敵を撞見ぞそ九牛の一毛ぞ。俺身を成るふ足ざるべ。且従
者の多ければ盤纏嵩ぞ外見ふ立て進退不便のこるこ。ふ殃危を招くふ庶ふ然ば
主従一人でも俺よく敵を避るの術あり又時種が武勇勁捷墻を踰屋ふ登る狙猴の
枝を伝ふが如く堅を破り鋭を摧くふ石の卵を壓をより易る加旃時種ふ千鈞の膂
力あり。碧言ば建保の義秀親衡又近世ふ多ふる妻鹿孫三郎ありとても捷るべ八あり
ぎり。あをめて幾番ふ多ふ勢の討兵と殺脱て恙なをこるこりこで用ひぜ。ん。と密め
て説諭ぬへ妙算い有理々々と佞合ぬ。ふ凝て実語と必ず面のちるこ。と時
種ふ多く猜と酒氣ふ乗じて進を出る。菴主目今俺君の宣ひ。を凝て虚語ありと
おひひふ欲ちぐ本事を安ん。と勢ひ猛く縁頰へ立を貞方呼林ふ已ねと宜べども醉る
人の癖ぞれ亦聴べうもあらぬ。妙算は合点ぬ。行燈の蓋撥取て灯口を其方へ

推向ひ時種これに便りなくて彼此と看廻しけるが脱履にありける最大なる青石あり。その長は四尺あまり四面は一尺四五寸もあるべし。然れば這石の重さは錢百貫あまりもありて力者の神なればとて只一人の力にては動すべくもあらざりしを時種は物ともせず究竟と縁頬より下り立て両肩袒ぎて件の石に両手を掛て両三番推動し矢声もかけず軽やかに引起し肩にうち乗せて又取なほして目よりも高く捧揚て又彼此と態と更に弄びて庭の樹間に暗きを數へ甚那方這方と運びて舊の所へ卸措くまで自若として面色変ず徐に堂堦らち拂ひ両袖斂め衣領搔合して故席に着しかば妙算は直と呆れて眼を睁り舌を吐て笑へくもあらざりしが少し久しく貌を更め却時種にうち對ひて鬼神も及がたき貴君の力量世に又儔あるべくもあらず寔に一人當千なる勇士也とぞ思ひけるが過言に非ずあるべし這為体を介殿なるも報まゐらせなば憑しく思ひおもわれなんといへば時種頷きて。それその誠のつみにて去年 義満世を逝りて将軍義持疑深く骨肉ですら容ざれば郡国の大小名鬼胎を抱きて鮮體して上洛せぬもの多しと聞ゆ世間ゆふたび乱るべし。倭る時節は千葉殿の俺君と合體して義兵を起しなるは虎に翅を添るごとく向ふ前なく百戰百勝且房總を平均し武藏を略して鎌倉に攻入んも易かるべしと勇むを貞方推禁めて噫声高し何ものか壁にも耳のありといふ世の常言も慎みて薄くは後悔あらん要あるなヨヲ辯は傷痛しと叱て又時種は頭を搔て遂巡して口を鉗めども酒の醉はまたく升りて頻りに睡眠を催しけり況貞方主は沙量ありければ漸漸に酩酊して席にも勝ざるあれば妙算は含笑ながら且盃盤を片よせていそく立て次の間に臥簟を儲蚊帳を垂て主従を揺覚し殿達夜食を召れずや臥簟は那首に儲てあり就寝なん歟のふなどと屢問れて貞方主は頭を擡げ左見右見て否々夜食は欲しからず痛く醉てす枕に就ん允し更と刀を引提て倭儼ながら次の間なる蚊帳の内に入ぬれば時種も引續きて宿寝も旅の無造作に主の後方に臥たりける當下妙算は

This library is very good, but the officer is very bad.

帳の下折戸を開けて、やよ殿も畑主も浄手水やうせあり及狩。倘小夜深て起出たるつゝま燭をとり、衣を着かへ、ちゝふ、ちゝとのゝられても生応なる主従ゞ枕轡らを夢もろ又覚ぐうもあらげりけり。然程ふ妙算い臥房の紙門を引開て且不盤を取納め洗ひ浄めつ庖湯ちうをと拭ゐつゝ出て来て那主従の臥房を。隔扉ふ身をを鳴立て。霎時寝息を窺ひ。荒ふと笑て抜歩ちつゝ。げゝふ佛間ふ退ぞ。時後れる夕勤鳴ら木魚の音寂て。夜いとや更中ふちつけり。

第六回

福草村ふ二兇奇功を奏ま
薬酒を釀し郡領来歴を詳ふに

却説その夜の子二刻比連立来ぬる両個の壮佼此彼打拾苛刻ふ赤銅造の両刀を十字の像く腰ふして。細鏃の戦襲壁手臑当鉄打ち抹額ふ戦鞋戎穿締て。先ふ進ぞ一人ゞ火縄ら持る薄月夜を柴門ふ近差て。二丈ばかり這方ふ小石を拾ふ。礫と擲礫の音い暗騒ちけん裡面ふ木魚の音絶て。仏間を出る妙算ぞ紙燭を兼て両折戸を。密と推開ぞ透しんでそを灘藏狩船藏狩と同へ両個の壮佼ぞ。然へと答て足ぞふ斧一躱て找ちぞ母ふ味ぞ美行れ狩今宵の首尾い甚麽ぞ。と問へされて笑ひげ。されがよ守ねり。殿より仰つけられ。隊の計較一箇も外さず終ふい那陀々花酒ぞ。必ずの随ふ喫しる。貞方も時種も醉て臥房ふ入りしより。二時あまり経ふけれ。今い死人ふ異ぞ。宿鳥を捉るより易ふ。縛の始末を説示さん。快々入かれと先ふ立。親ふ引ぞ。胞兄弟ふ。草鞋を脱捨て正屋ふ入て坐を占る。難藏声を密して。喃母ふ御ふ咱们も一役兼て舛屋の販子ふ変着。那陀々花酒と毒ぞ酒を。節分ぞ。通魔ふ。ら又賣態も妙ぞ。と誇れば輪じと第の船藏ふ。調子ふ声を低めて。那酒ふ豆府肉ふ敵藥咲合られ殊さふ。その毒劇しと。ぞ。ぞ。咱们ふ豆府肉賈人ぞ。そ一役勤ぞ。那奴们ふ咲ひ狩と同へ妙算領ぞ。そらふ脱落ぞ。二芫椀ふ装着て露も送ぞ咲ひ。その進退ぞ

あるれど容易くは那酒に入る日殿より賜りし那酔笹用ゐ機関あり。樋をと内を両箇に隔て外面に漆をとり塗りけれと目標に黒き方に陀々花酒あり黄なる方に毒なる酒あり茱酒と萬んとなるとき黒き方と下に上なる空敷を指して塞げば毒なる酒に此も出ず毒なる酒と盛とき黄なる方と下に上なる空敷を指して塞げば茱酒に此も出ずるよう殿より賜授されしとも俺身の喫と人に任せて盛とそなる通麓も沒るに酌と人多き遮午さびしくその度毎に爵に酌て喫むまに骨の折る所為況や既に乱酒に成るそれ倘も錯て毒ある酒を盛に俺身の喫むべき歟と思へば愛妾時も由断ならぬ苦労に今又話まず如き軽き所行でなるべし破れに成るのことなるべし俺身に矢庭に殺さるべし命なける大役を左や右や勘果せ親の心を子に知らぬ僅に豆腐賈人と酒肆の販子に打扮する今ばら誘ひとられて物とも思ふ胞兄弟倶に膝立直りとそこの談でもあるべきに兄弟に赤らかと那奴仁名と

這庵へ輒く引入れぬ一そと問へば妙算に成れとも那叛逆の風声の世に隠れなく貞方も亦偽なる必這地へ来ることあんぬ然るとき便黙とそ留めて絆と約へと殿より仰下されて那主従の骨相書と訪像さへに賜ひしかれより日毎に門に立て這頭を過ぬ旅客に問ふくらとつけたりーふけに亭午の比柴門の頭を過る旅客あり主従なりんとなくて一個に縮羅の単衣を被て深編笠に面を置て白柄に鮫鞘の両刀を帯たれに問ぬ武士又一個に従者に年紀に三十あまりなる一身の長高く骨逞く長に一刀を腰に帯て裳を引折り脚絆を結て面を那従者の面魂その餘の模様も訪像に合て見れば新田貞方主従なる彷彿たり。胸に忽地ちに騒ぎ折折もよく外面を窺に黒と赤とを大く凡戦ふて已ぎりければ那主従に成るも遮で停在て見る程に赤鶏に竟ふ物員て逃るとき遮さに黒鶏の赶て俺身の不とりに来ふけり。登時裡面より箇様なれ

俠客傳第一輯巻之二
有條第九
ゆきん
俠客傳第一輯巻之二
十六
難藏船藏夜來會錢ト庵
ひるはのちひのわはそめく
荒神松五郎

獨語〻密引て試るを。那主從の外面を。伺ひてうち驚き。其ふ。俺這
葦と南朝ふ由縁あるものゝどの隱宅を訪とはげん。那從者ふ呼門し。秋昌ふ堪ふを
言種ふ霊妙時の宿りを請ひよりそや圏套ふ入りし。當下俺又後々の為ふとはゞ
あれば。凡戰ふ勝る黒鷄を。ひとあく窟ふ絞殺し。樹梢の間ふ葉措つ。然りとあるを出
迎て正屋ふ倡引茶を薦めゝと丁寧ふ欵待を程ふ件の武士ば銭トふ問ふてその身れ
宿望の成果を知らまくほしとはゝ。ひらく便りを沼て箇様々々ふのゝ誘へ賜て佛間ふ相
伴て。銭トを占ふやうふ。七占象い大吉と。報知と欽せ。觀世音ふ這歡びをうさんを
稍久く。普門品を讀さうに佛間で時を移せ。拵置れ。義貞以下の位牌をよくも見
せん為。那仏の果て七位牌を。目を瞑し〻。愀然しるあふを。問ひもあるに件の武士い新
田貞方又從者い畑六郎二時種ふてあるけり。と猜きるを猜しても。名告らせ。人
たゞへゝ。ゝ決めゝ。豫の計謀い今の時を。はゝけれが正げふ。俺身の素

生を說ふ。新田ふ舊縁あるゝと殿の隱謀佐々と誠。ゝふ耳を告て。ゝで新田の嫡
孫を總大將ふとり立て。共ゝ義兵を起し。ゝ軍ふ名あゝと千葉城内で軍議あゝを
笑さうとて。旨く相譚課せ。ゝも貞方い凝て早ふ名告ゝさうと。那時種ば焦
燥て主をもまこで佐々と名告て意中を諦ゝ。佐れが猶も主從の心を緩させん為ふ。
けふ占ひ銭トの大吉とはゝ。豫の口傳ふ辯を加て最も愛さく說ふ。貞
方主從ふ歩て。欽ざるふあるれども南北両朝ふ壁言たる。赤黒二隻の鷄の凡戰ふ
赤鷄の肩ふ。心ふ掛て云云とはゝ。折ふを慰めて。鄕ふ絞たる黒鷄を自滅を
ゝとはゝを瞞めて是も。ゝ祥ゝとを。吉ゝれば。ゝ解て遂ふ止宿の心ゝ。佐る折
ゝ。伶達ば酒と豆腐を賣ゝを。ゝれ却貞方を留めゝと。隱語を知らせ。ゝ
るふ胆の洗れゝ畑時種ば旅胥力ゝ万夫無當の三男ゝと豫も。ゝ
ゝとはゝふ言を設てそのゝせふ那奴酔る折れゝを口車ふ乗せ。ゝ出る擬

議せざ下立て。句ひよ。那縁頼の頭を。脱屣石を引起し。肩ふうち載し棒揚く庭の樹間を幾遍欲とと逆らう又故の所へ。とう措うた抑幾百人力あるとう。最怕る強猛者なれども。智慧浅けれ騙素易く。那陀ろ花酒を注ぐ。飲せかけれ中られて。主共侶ふ酔臥う。此皆是殿の方すよう出る計畧その圖ふ當りて。大功をふ成就をれ。只這一挙ふ亡者の悪名を雪むべく。絶る家を興さんと。ちやけふ羽立の程ふ。わうん。欲び。愛とと。一五一十の長物くうふ齊一勇む難藏船藏笑片向くうち領是ふ就くも感し入る。人殿の御討畧貞方主従這地ふ来とべ。必その憩ふべ所と儀く細伐張れと。彼此ふ下知あり。折近曽ふ牙の銭トの流行ふうくく忠告の密訴と聞食入られ又俺們ふ日ふうよう出賈ふ打扮て。彼此とくくち巡らせ。その餘も客店酒肆茶店ふ密計を徇示さて。骨相訪簫を遍与させ。准備い自他食異るぢり。ふ幸ふと母れの宿所へ那主従の立寄ふ人力るとと天の錫佑とび立身疑ふ。

定ふ賀をべ賀をべと辞ひとく答る兄も弟も如意満足の欲ど限りなうし。妙算ふ出るそと。倶ふ笑々領て。那陀ろ花酒と飲るれ。縦幻術ありとも勇力儔わるぞと。心神共ふ亡失て。解薬と用ひざる程へ幾日を経ても醒るとなく。竟ふ伏死ふ至ると正ふ惜ぶ。されども寐さて措て捕栄ふうん快綱めて訴ぎや。とふと船藏ふ女才ある。欲郷問ふ乳ふ隠語と。那貞方主従の支徒と知らせ。その折咱们飛ぶ似ふ城内ふ走まりて。ふも訴黒せうと殿のあん欲ど大ふ。ふらべ孤い士卒と将く。汝ど母の宿所ふ赴て実捜と違ぞへ。那主従を牢轎ふ乗て鎌倉へまあうせん。汝て走り還りて親同胞と共侶ふ守護と孤を福草村る母の宿所ふ等ひと仰出されるふう。恥と躍と旋て走りかうう件のと。大哥ふ報て夜と入うちれ立て来るを。へべ又難藏も目今母れふられ。最も緊く綱て殿の恩臨と俟るべ生拘るふ異事ぞ。ひく華ふうべれども。ふも似て快醒て姿を隠を狡ふくも反駁ふせうまうべ本

直ちに踏雲に仕支且一覽して後に楚と隊與と定むべし。船藏立ちと急せば心と
咎て行燈を紙燭と乗て火を移し胞兄弟俱に立ちて紙門を半分推開て醉眼
に主従を瞬もせず得と見て紙門を圍て退たる難藏雪辛時沈吟して那陀々花酒の奇
特に目前主も家隷も仰反て死しるのに異ねども然とて虚と下されし殿の思臨に
程なくして船藏途まで出迎て母屋の甘く行られる始末と具に申えげて伴て来よ。
殿のことせのに多人數に心つよりて折れまして俺們兄弟先に進て那主従に
索を掛に倘醒うとも踏雲氣に示せ船藏連に領て出の議いぐと耳に示せ
用心怠り甲夜より曇り大雪れて月鮮明に蕉火の下でも便りあるぞ。小ども咱們
走一走に鄰村まで出て来て臥房に心つけ草鞋と穿着て東と投て走り
け。恁而妙算難藏に柴折焼て茶を沸し物売に竹筒を取て實客儲の鹿
掃除し果て候程に庭の草無に集く虫の露に声に肌膚寒く暁方に

隨に猛可に中の人馬の足音器械合に許ヨの士卒と前に立し後に備て馬の足擦と
に中の人馬の足音器械合に許ヨの士卒と前に立し後に備て馬の足擦と
に中の人馬の足音器械合に許ヨの士卒と前に立し後に備て馬の足擦と
に中の人馬の足音器械合に許ヨの士卒と前に立し後に備て馬の足擦と
威の身甲に古金襴の戦袍輪鐵入る利兜子打鳥帽子に黄金製作の大刀を跨て南
部栗毛の三歳駒に雲珠鞍措し傾に乗の鞍に意氣揚々と柴門近く
程に案内に立る船藏に一反なる那方より先へ走りて遽く折戸を破と推開に母屋
大哥も快出の殿の渡りに呼る声に妙算に難藏と共伯に慌忙に迎て折
戸の左右に平伏る登時并亂に究竟の士卒四五十名に茅屋の四方を捕囲せ馬乗
放て悠々と正屋に到て上座に登に尻を打に物具に老當近臣齊一左右に
坐列る。恁り程に妙算も迹に跟に裡面に入て両個の見子共伯に恭く拜謁に
亂逆に入れ立て當庵の女僧妙算名に近うまれと招に立て御ぐる保養美に却に
南方の殘將新田貞方に曇義に陸奥に沒落せる追捕者に人ども他に幻術

あるをりそ。水をそれぞ水に隠れ火に遇へい火に隠れ。ヨヲ勢の討るを殺脱て出没定るまぐ
まぐ。それを捕るのるるを又貞方のをるを。相後に一個の猛者あり。畑六郎二時種
是なり。亦その勇力世に捷れて。且剽姚に長たれば。是だぶ久くるを入ぐ然をそち捨措
とえい只是国家の患なりあるを。室町鎌倉両御所の大れ心安ぐ成。貞方なるを捕
捕て。まるまるめぐ。勧賞乞に依るべ。とりと厳るあん下知あり。兵衛尉苟もその年来
鎌倉殿の御恩ふよりそ。父祖の舊領を相續あるを。且宿願もあるをそ日夜肺肝を
摧をそ。稍計畧を得るるぐ。執権憲定入道より告免許を稟て。兵衛尉叛逆の企
あるをそ。都鄙遠近に流言せり。那貞方を孤ぶ城下に輒く誰引とぬ為あるれども
尋常なり。隊配をそ捕笠をそ生拘んと厳るぐ。数百の逞兵あるとも他又例の幻
術をそ脱去るをるぐ。その故に左右なるを。又思慮を回らをぐ。家に舊く
仕る。陀々花酒の一方あり。此は是唐山宋の商舶もたらす。宋兵に喰れしめぐ。小松内大臣
重盛公に献りしる奇方。人に勿論。狐狸毒蛇神通不思議の丸とも。件の薬
酒を喫て後醉て睡に就くとえい心神遂に失て。七日を累ね月を歴るまで。解薬を用ひ
ぜるとえい。醒ぎて死ぬをの。壁言へ那劉玄石ぐ中山千日の酒にも捷りたり。然れば又宋の時
ヲ人の。旅客をどこ飲しめ。瞑眩をぐ間に殺して東西を覚らずとぶ。家汗藥をあ
毒の循ること速をそ。飲むるの卒に倒れも。統に時を移をとえいをそ醒来らをそ。憤に
陀々花酒のそれに似たるも。睡ぐ覚れいその毒循ら。一ぐ毒の循りて後に醒ざるをと右の
如。是その捷れる所。軍陣に要あるぐ。をそをぐ家に伝るとをる。ぐ近衛院に死
時に妖姫玉藻ぐ来ふりぐ先祖千葉介平朝臣常胤主と三浦介義明上總介
廣常等に勅命をそ下野州奈須野るる。狐を射猟せ。とえ重盛密竊にぐ先祖を。
側に招き近つけそ。和殿奈須野に到る折九尾の狐ぐ人に変をそ障尋を敬をとあり。
その機をそ猜るを。便黠をそ這陀々花酒を。飲しめそ斃せり。這藥酒に依をそ

とく傳来效驗鮮藥の方まで具ふ伝授しあひしより今ふ至るまでその奇方を家の秘書として相傳せりまことのそのある比禁獄の者一人ふ件の酒を飲しめ果否を試るふ伝ふ弥増て経驗左神妙へ怎れば亦那貞方ふ這藥酒を飲しめ隱形五遁の術あるともそを施さふ由なくて搦捕れんと疑ふ然れば旅客の立よふべき客店酒茶の坊賈們いはゆる神社佛閣ふ至るまで計策を徇ふ訪像ふ引合へ倘貞方ふ至るまで便黙を以這藥酒を薦めて睡ふ就しとて許さうせと下知へ件の陀々花酒一丼ふ機関ある醉筒と鮮藥一貼を相添へその所共ふ遞与置あり鮮藥へ西女ふ東西ふ似れど倘衍て自方のみ俱ふ飲まるも甘べそを速ふ救ん為へ介るふ當庵の女僧妙算母子へ原ふ刑餘のみなれども近屬その銭下を問ふの日毎ふヨヌれべその子灘藏船藏と共侶ふ孤ぐ密計ふ與りて功をも先人の罪を贖んと願ふまゝ藥酒醉筒鮮藥を預けて絆を約へ甘ふ孤ぐ計ふる所ふ違へば新田貞方主従へ那風声を実語とく。

果して當所ふ来る折妙算逸速く出て言を設て巷ふ引入れ遂ふ件の主従ふ飽まで陀々花酒を薦め醉臥めく輒虜ふ甘ふ状ふよりて詳ふ知りぬその功莫大なるとりて灘藏船藏ふが親へける荒海鰐九郎有基ぐ身後の罪名を削去り両個の児子を召出て本領を返し與へべし勿論貞方時種ふそその身の意中をとりて諦へ名告りとりて失錯あるべきとねども孤且目今実検せん細め置へくふ甘べ妙算頭を擡て冥加ふ餘る御恩澤亡主大きふふ面を起て親子三人ぐ歓び皆殿さの御武徳ふて然しも搦獲ひとりなる那貞方ふ主従を老る尼ぐ口車ふ乗へて虜ふ去べりへ骨の折れるる殺ふ既ふ醉臥甘とり死へるのふ異なるれべ細めふ易へ然べふ下知をまことふ甘べ成とく伝りぬ。とのふ兼胤領ぐ細めふ快々せぎる。とふ尋たる下知ふ從ふ難藏船藏ヨヌ勢を憑む准備の捕索近習の壮武者共侶ふ躯て臥房ふ

稠入々。黒白も知らぬ貧方主と畑時種を引起し索を被けても倶落々々と縛縛栄なく倒れけり。既ふして亀亂も臥房の内ふ拭を入り近習ふも燭を揚させ。再件の主従を引起させて汐とえて寝れれども人品骨柄現貧方ふ相違なく。藥酒の效驗神妙也。那幻術も勇力も怕るゝふ足らぬれども心を緩さず徳あるん吊のそ者させ。細轎さを這臥房まで舁入させ。主従倶ふうち乗せよ目を経るとも醒るとあらずとゝ思へども一日も留置んハ要るし孤ハ這首より啓行して。あの生拘を鎌倉へ牽のそ出るゝ少えあげて。灘藏と船藏ハ允と今番の伴ふ立せん。就中妙算ゲ才賞ゝ感まるふあまりあり鎌倉ふ赴ゝく。綜の始末を少えあげ。御沙汰あるべ。傳達ふて送漏もあん。執權問せふとゝ汝みづから演説せ。宮中の首尾宜しかるべ。依れハ汝も推續ゝく。あく那地へまゐるべ。よりて雑兵一両名を送と路の案内ふせん。あの義もあるゝ。とて寧ふとゝ示さん。賞感大々あるべけれ。妙算灘藏船藏ハ天ふも升る心地と異口同音ふ言受あり。欲び限りなりけり。然程ふ雑兵ハ准備の為ふ吊のそ来るし二挺の網轎子を舁入るゝ亀亂下知とゝ侭ふ貧方主と時種を這轎子ふうち乗せて緊く鎖と撞出させ。許まの士卒ふ成らん。鑣奴ゝ乗居ふ馬ふ内りとうち乗れハ。荒海灘藏船藏も近習の中ふ立雑りそ馬の左右ふ隷添ふたり。隊伍系を齊々と徐行く方の山峡ふ横雲ゆる朝出立彼誰時の風戦庭の小草を折布ゝ。乗時目送る妙算。その身もけふの起行ふ心のそくるりふけり。原ふ這妙算ゲ良人ゆりける。荒海鰐九郎有基ハ亦足千葉の家臣ふて千葉郡の眼代ゆゝ。邪智貪婪の黒坐市今ゝ年来私然まりける民の為ふ嗽許せられて罪戻脱ゆふ辞ゆく。久く禁獄せられふ獄舎の中ふ身まりけり。あの故ふたの妻と両個ふ児荒海灘藏船藏ハ城下を追放せられ。他郷へ出ることを凡されぬ放免のゝ。ゆゝ封内ふ置れゆりゆゝ戦国の沿習也。虚実を外へ洩さとて是より以来母子

畢 平氏蔵 印 發

三名身の便者なりしが難蔵と船蔵の人の為に馬を追ひ又川舟を漕ぎしなど。それもそう備ふ者稀なれば果は博徒に寓居して僅に口を餬ひけり又その母親は女僧にあり妙算と法名して福草村に庵小なる世帯を締び托鉢して饑に充んと欲せしに。鰐九郎が非義ヨメなりしは。きく妻の助言ふよれり。依れば新尼妙算は鰐九郎より心ざしのいとおそろしきものなれども。里人們皆憎みて。合さひどるの内の施を受れヨメなりしれば妙算はよく困窮して。いとでせん術なるけり。小るに這妙算は原是似非巫の女児なり。婦女子に罕なる小文才あり。そもそも幼稚の時より。親の生活はまなりける。陰陽説相卜筮の趣を見熟聞熟なりけるに記憶も人に捷れかけまを今に至るまで。これを忘れざる人窮まれば邪念起る。凡浮世の習俗なれば妙算は苦しきに随ふ年来念ずるは。観世音より夢想の示現を蒙りたりと詭倡て。貴き起せし銭にて生活ふせまく欲しく初の程は街衢に立辻に任せ人の歩を駐めその吉凶を占ひに信ぜるあり。信ぜざるもあり。信ぜるのは魅されて。当らずとも遠からじと。先笑ひし里人も新に走り奇を好む見識なり。次く立ちて世評高くなる随に妙算は又街衢に立ざる日毎に庵に在りて。そのの占ひを行なふに。難蔵船蔵なるも母の庇を身の皮なるとのいそ来りて。恁り一程に當国の郡領千葉介常胤の年来鎌倉に出仕して。侍所別當の補せられしことを望みかねも左に右に障りありて。いまだ宿望を遂ざりしに。貞方二を追捕の為に京鎌倉より下知せられて。捌捕てまるるせば勧賞は乞ふに依るべしとの厳ふ沙汰ありそ貞方主従を誑引きて虜ふせばその功をもて俺宿望の成就せべしと。母思をしく却鎌倉密訴して計策を献じ。并乱叛逆竜城の趣を詭倡て近国に流布して竊に家傳の薬酒を醸して客店その餘も坊賈們に計策をとらせ。件の薬酒を預措く折妙算もようを洩さず。忠節の密訴ありと倡て千葉の城内に推参して賤尼は亡夫の罪によりて城下を追れしのれども。殿のかりをいふより。身の外をとらず

志。推て忠告をなすべし。その所以の箇様々々と已が錢トの秘する為体を演述し。怎れば客店酒肆の内も捉りて賤尼が其の如く衆人聚合する所いかでか這間の密策を預ることを得べし。指見難藏船藏船と共侶の日毎の群集の心どうけて貞方這地に来たるの術計を旋らし藥酒を薦めて虜にしてまわらしまべし。倘功成らば児子をも召還さるべんと。只願ひまつる。とゆえあげくる思慮口才女流なれども支を成さべ面魂をなれば兼亂則その乞に随ひ貞方主従の訪像と藥酒その餘の東西をも形のごとく取らもつて妙算は又その外に新田義貞以下の位牌を造りて仏間に置んと請ひ。その議も亦ようれば兼亂又件の位牌に古色を着て造らしつつ竊に妙算に取らせけり。怎而兼亂と妙算が秘計不幸にして露れ然しも名将勇臣の運の窮とのひるがら。果敢なく虜にせられし薄情なりけるなれば畢竟貞方主従の錄倉へ牽かれて去れて。後の話説甚麼なるか。次の巻に解分ちを聽かめ。

開巻驚奇俠客傳第一集巻之三　終

172
25
15